

冬屑すずや

挿絵:ウラジロ

犬耳娘と幼馴染に
赤ちゃんをせがまれて
精果がカラにないそうな件

にんからっ!



プロローグ

第一章 犬神さまは妊娠適齢期

第二章 幼馴染は退魔師？

第三章 初めての情事

第四章 犬耳巫女のオナニーショー

第五章 初デートは■女の君と

第六章 メイドさんとエッチなオモチャ

第七章 あなたの赤ちゃん、わたしに産ませて？

エピローグ

登場人物紹介

ちよ 千代

神通力を得て姿形を変えられるようになった山犬で、犬神と呼ばれる存在。初対面の陸に何故か好意を抱き、子作りを迫る。

ものべすずね 物部涼音

犬神を使役する一族の少女。千代の主であるが、彼女からは認められておらず主従関係とは程遠い。陸の幼馴染でもある。



わたぬきりく 綿貫陸

一人暮らしの大学生。生まれてこのかた彼女がいなかったが……。

プロローグ

駅前の牛井店で夕食を済ませた陸りくはいつものように本屋へ向かい、しかしいつもと違うなにかを感じて足を止めた。

青年の住む街は東京の都心から少し離れており、ぼろいアパートからやや規模の大きい集合住宅まで幅広く集まる場所だ。平日の夜八時であればスーツ姿のオヤジたちが多いが、今日は金曜日とあって若者がカラオケ店や居酒屋の前で楽しそうな声をあげている。

これはいつも通りといえるだろう。

しかしそのうちの何人か——特に女性がこちらを見ているような気がしてならない。おまけに笑顔さえ浮かべているように見える。

これはいつもとは程遠いことだ。

(おいおい……ついに幻覚か?)

それに対して悲しいかな、喜ぶよりも自分の目を疑ってしまう綿貫陸わたぬき、二十二歳。

それも仕方がないかもしれない。生まれてこのかた彼女がいたことはないのだから。

極端に太っているわけでも痩せているわけでもないが、容姿がいいわけでもない。なので女の子に見つめられることはもちろん、微笑まれたことなどあったためしがない。

だが、彼女たちはどうやら本当にこちらを見ているようだ。やや顔を伏せながらも、なにやらききいきい話をしている。

(俺のこと話してるのか？ 変な格好してるとか、嗤わらわれてるわけじゃないよな)

今日はジーンズに黒の半袖Tシャツ、そして灰色の薄手のパーカーを羽織っている。特におかしな格好ではないと思うのだが……。

ちよつと気になった陸は自分の服に視線を落とす。そのとき、足元に小さな白い犬がいることに気がついた。

「うお!？」

思わず片足をあげると、小犬はこちらを見上げて嬉しそうにしっぽを振った。

「やーん、しっぽ振ってるー」

「かわいいっ」

遠くから女の子たちのはしゃいだ声が聞こえる。

(そっか、そうだよな。俺のこと見てるわけがないよな……)

やっぱりなと思いつつ、それでもどこか期待している自分がいた。淡い期待が見事に粉砕されて肩が下がる。

「てか、お前いつの間になんだ？ 飼いまいののか？」

陸は気持ちを切り替えると、小犬に向き合うようにしゃがみこんだ。

見たところ首輪はない。身体のサイズはバスケットボールくらいだろうか。ピンと立った三角耳にやや細長い顔つきをしている。毛は短いながらもこもこも厚みのある身体つきをしており、脚もけっこう太いようだ。もしかしたら大型犬の子犬かもしれない。

（真つ白だけど、ハスキーの子犬かな？ それとも白シェパとか？）

可愛くも精悍さを感じる顔つき、そして身体の特徴からシベリアン・ハスキーやホワイト・シェパードの血をひく子犬だろうかと勝手に推測する。

「飼い主はどこだ？ きつとお前のこと捜してるぞー」

そつと頭を撫でると、子犬は色素の薄い瞳をうつとりと細め鼻をヒュンヒュン鳴らした。温かくてもこもこふわふわの毛に撫でる手が止まらない。子犬もひとしきり撫でられてはこちらの手を一生懸命舐め、もつとしてほしいと目で訴えてくる。

（かつ、かわいい……！ なにこれかわいいーなオイ！）

小さい頃は犬図鑑がぼろぼろになるほど読み込んだ陸である。こんな態度をされてはたまったものじゃない。

いつまでもずつとこうしていたいが、しかし一方では焦りも感じていた。

子犬の頭を撫でながら周囲に目を配っているのだが、飼い主らしき人物が一向に現れないのだ。行く人来る人みんなこちらを見てくるものの、近寄ってくる気配はない。

「うーん、マジで困ったな……。お前、ずいぶん遠くから来たのか？」

子犬の脇下に手を差し込み、そつと持ち上げて目の高さを合わせる。すると子犬はピンク色の舌を出してこちらの鼻先をぺろりと舐めた。

「だぁーもう、お前かわいすぎっ」

陸は思わずその小さな身体をぎゅつと抱きしめる。

とてもじゃないがこんな可愛い子犬をこのまま放り出すことはできない。胸に子犬を抱いた犬好き青年は、飼い主を捜すべく夜の街を歩き始めた。

歩くこと二時間――。

駅の周辺はもちろん、住宅街まで足を伸ばしてみたものの、腕の中の子犬を見て寄ってくる人はおろか犬を捜しているような人すら見つけることはできなかった。

子犬はいつの間にか気持ちよさそうに寝てしまっている。

(まいったな……。このまま飼い主が見つからなかったらどうしよう)

ペット禁止のアパートに住んでいるのでこのまま連れて帰ることはできない。かと言って見放すわけにもいかないが、だが、しかし……。

心の中で葛藤する陸の足が住宅地の中にある小さな公園で止まる。そこからさらに悩むも、ついに眠る子犬をそつと下ろしてしまった。

子犬はひんやりした地面にハッと目を覚ましたものの、また寝ばけ眼でその場にぺたり

と座り込んでしまふ。

「ごめんな。ちゃんと飼い主見つけてやれたらよかつたんだけど……」

無責任だとわかつていながらもふわふわの毛並みを一撫でし、後ろ髪を引かれる思いで歩きだす。

目が覚めたのだろう、すぐに後ろからキューキューという切ない鳴き声が聞こえてきた。歩みを止めずにちらりと振り返ると、一生懸命追いかけてくる子犬の姿が目に入る。

しかし小さな脚ではどんなに走っても陸に追いつくことができない。

次第にお互いの間に距離ができてくると、子犬は悲しそうに吠えて待つと訴えてくる。聞く者の胸を締めつけるような悲痛な鳴き声に、陸の決意は一分ともたなかつた。

「ああああああ！ やっぱ無理！ とりあえず今日だけ、今日だけだから——！」

立ち止まって走り寄ってくる小さな身体を抱き上げると、子犬はしつぽを千切れんばかりに振って顔中を舐めてきた。

こんなけなげな生き物をどうして少しでも置き去りにできたのだろうか。今日だけはこつそりアパートに連れて帰ろう、そして明日こそ、この子犬の飼い主を見つけるのだ。

そう決めなおすと、陸は自分の部屋へ子犬を連れ帰っていった。

第一章 犬神さまは妊娠適齢期

(……………ん、なんだ……………?)

まどろむ青年は胸の上に不思議なぬくもりと、ずしりとした重みがあるのを感じた。それにかすかに甘いような匂いもする。

なんでだろう——と思ったところで、昨晚子犬を拾ってきたことをぼんやりと思い出した。

(子犬……………ダンボールから出ちゃったのか?)

昨日は部屋に帰ったあと、ネットで調べて子犬の食事を作ってやり、その後は折込みチラシを丸めたボールでついつい夜遅くまで子犬と遊んでしまった。そのせいか目蓋がまったく持ち上がらない。

もうすぐ夜が明けるところで簡単なダンボールハウスを作り、そこに子犬を寝かしつけたのだが、結局自分のところに来てしまったようだ。

手を毛布から出して胸のあたりにさまよわせてみる。

やはりというか、丸くて温かなものが指先に触れた。その触り心地は、なにやらサラサラしているような?

妙な違和感に陸の頭が急速に活性化する。

重たい目蓋をなんとか開くと、うす明るい天井が目に入る。カーテンを閉めているものの、普段からの感覚で今日は暗れだと判断できた。部屋の明るさ具合からいって、もう昼をまわっているのかもしれない。

陸は横たわったまま胸の上に目を向けた。

「……………ん？」

そこにあつたのは子犬の身体ではなく——人間の頭だった。

（あれ？ 俺、寝ぼけてる……………？）

いったん目を閉じ、今見えたものの情報を整理する。

てつきりふわふわした白くて丸いものが見えると思つたのに、視界に入ったのは学校でよく目にする机に突っ伏した人のような頭頂部。ただしその髪の色は黒や茶ではなく真っ白で、つむじらへんになにやら小さい毛玉みたいなものがふたつ、くっついていた気がするが。

昨夜自分たちが帰宅する前に何者かが侵入していたのだとしても、六畳一間しかなくおまけに押入れ開けっ放しの部屋に隠れる場所などなかった。当然寝る前に窓や玄関に鍵はかけていたし——そう、思い返す必要もないくらいに、この部屋には自分と子犬しかいなかったのだ。

では、今見たものは？

「ゆうれい……」

無意識につぶやき、硬直する。

同時に閉じていた目をさらにぎゅっと固くつぶった。

（おいおいマジかよ！ 今まで幽霊なんて見たことねえのに……てか見えるにしたってこの物陰にちらりと見えるとかじゃねえの普通！ 上掛けの上にダイレクトにいるとかありえねーし！）

眠気はもはや吹き飛んでいた。冷たい汗が全身から吹き出してくる。

ちよつとでも身体を動かしたら幽霊が突然襲い掛かってくるかもしれない——そう戦慄する陸をよそに、彼の上のものももぞもぞと動いた。

（ひっ……）

悲鳴が漏れそうになるのを必死でこらえていると、ソレは声を発した。

「ふああああ………っん………」

あくびするような声に、背伸びするような気配。

恐ろしい幽霊には似つかわしくない、やけに人間じみた所作である。おまけにやや鼻にかかると甘く可愛い声をしていく。

しばらくじっとしていると、やがて小さな寝息が聞こえてくる。

(……これ、やっぱ幽霊じゃなくて……人間か?)

幽霊ではなく人間だとしても不法侵入されているわけだから恐ろしいことに違いないのだが、発せられた声はまるで女の子のそれに似ていた。

勇気を出し薄目で胸元を見やる。

相変わらず人間の頭部が見えるが、先ほどと角度が変わっており、毛布に半分埋もれた顔を確認することができた。

見えたのは、ほんのり桜色に染まる柔らかそうな頬と、伏せられた長いまつげ。

これまでのわずかな情報と照らし合わせ、次の瞬間、陸はカッと目を見開く。

(おおおおお女の子だ……！ 女の子が、俺の上で寝ていらつしやるうううう！)

そう判断した途端、心拍数が先ほどとは比べ物にならないほど一気にあがる。

もしかして、自分は玄関の鍵をかけ忘れていたのかもしれない。そしてこの女の子は部屋を間違えて入ってきてしまったのだろう。きつとうんと酔っ払っていて男がいることに気づかずに寝てしまったのだ。

そう考えれば今のこの状況にも納得がいく。

(うおおお止まれ、止まってくれ時間！ この瞬間よ永遠なれ！)

「……ん……んううう……」

「ッ！」

こちらのただならぬ気配に気づいたのか、女の子はふたたび伸びをした。

ぎくりと固まると、彼女は目が覚めたのかむくりと身を起こしてぶるぶるっと頭を振り——そこで二人の視線が合った。

(ヤバイ叫ばれるッ)

そう思い反射的に身をこわばらせるが、降ってきたのは女の子の金切り声ではなく榮しげな声だった。

「あはっ。陸もお目覚めか？」

女の子は陸を見下ろすと、にぱっと笑う。

なぜ自分の名前を知っているのか、という考えは浮かばなかった。

言葉は意味をなさず甘く可愛らしい声だけが耳に残る。

「陸？」

女の子が今度は不思議そうに首をかしげる。その拍子に肩より少し上の白い髪がふわりと揺れた。

(かわいい……いや、そうじゃなくて！)

「なんで裸!？」

そう、布団の傍らに座る彼女は、素っ裸だった。おかげでたわわに実った大きな胸の中央——ピンク色の突起がツンと立っている様さえ網膜に焼きついてしまう。

初めて見る生身の女体に全身の血がある一箇所へと流れ込んでいく。

慌てて顔を背ける陸に対して、女の子はきよとんとするだけだった。

「なんでとな？ それは毛皮がないからに決まっておろう。陸は裸が嫌いか？ 確か人間の男にとっては、女は服など着ていないほうがいいと聞いたが」

「時と場合によるし着衣によるエロも大変需要がありますか早く服着てくれ！」

これではまともに話ができない。それにこういう状況にはとにかく耐性がないのだ。

急速な成長期を迎えている愚息に意識をのつとられれば、身体による会話を始めるかもしれない。そうなれば刑務所行きだ。

だがこちらの焦りとは裏腹に女の子は相変わらずひょうひょうとしている。

「ふむ。服がなくても別にわしは困らぬし、おぬしささえよければ——」

「無理っス！」

「……仕方ないのう」

そう言うとき女の子は毛布を自分の胸元に巻きつけ、風呂上がりのような格好になる。

「ほれ、隠れたぞ」

「あざっす」

横目でちらつと彼女の姿を確認すると陸もようやく身体を起こした。そして残されたタオルケットでさりげなく股間を隠す。



陸はなんでもないというように許可してくれたが、その顔に寂しそうな表情が浮かぶのを見て胸に罪悪感が押し寄せる。

「一緒に入る？」

無意識にそう口走り、涼音はハッと口を押さえた。

（ちよ、わたしなに言ってる……！ 一緒に入ってるって、そんな……）

自分でも信じられないほど恥ずかしい提案に慌てて発言を取り消そうとするが。

「俺も入っていいの!! マジか！」

陸の目が俄然輝きだすのを見て、もう訂正することができなくなる。

かくして――。

（なんでこんなことになってるのよお……）

濡れないように髪を頭頂部でお団子状に結った涼音は、いまだに困惑しながらもユニツトバスに足を踏み入れた。胸と大事な部分はフェイスタオルを縦長に当てることでなんとか隠れている有様だ。

トイレと浴室が別々であることが当たり前の彼女にとって、蓋の閉められたトイレの向こうに浴槽があるのはなんとも不思議な光景だった。浴槽の内側にはシャワーカーテンが引かれており、その向こうではすでに陸が待機している。

「ちゃんとタオルつけた？ こっち絶対見ないでよ？」

「わかってますって」

涼音は閉じられたシャワーカーテンの端からそつと顔をのぞかせて、陸がちやんと反対側の壁を向いて立っていることを確認した。腰にも念押しした通りタオルが巻かれている。初めて見る男の裸にどぎまぎしつ、中に入って背中合わせで立ち、フェイスタオルを浴槽の縁に置く。

「じゃ、その、シャワー貸して？」

「はいよ」

返事とともに後ろに伸ばした手にシャワーヘッドが渡された。しっかりつかんで胸元に手繰り寄せお湯を出してもらおうが——出てきたのは冷たい水だ。

「きゃあああ！ 冷たっ！」

「おい大丈……ッ」

水から逃れようと後ずさると、背中にとんと固いものが当たる。肩越しに振り返ると、いつの間に身体の向きを変えたのか、陸の胸板が目の前にあった。

「きゃ……」

驚いた拍子に足がつるりと滑る。あつと思ったときには身体のバランスが崩れ——しかし転ぶことはなかった。

「うお〜……。危ねー」

顔のすぐ横から陸の安堵したような声が聞こえてくる。しかし涼音は口を開けば心臓が飛び出してくるような気がしてなにも言えなかつた。

なぜなら今の状況は、背後から陸に抱きすくめられる格好だったからだ。

いや、抱きすくめられるというか。

「言うの忘れてたけど、お湯の出始めは冷水だからな？」

「……………て……………ッ」

「え？」

「手えどけなさいよおおおお！」

陸の両手がつちりと両の乳房をつかんでいた。

「いやでもさ、涼音は浴槽の中で身体洗うの慣れてないだろ？ また滑らないように支えてない」と

てない」と

いかにも真面目そうな声を出しているが、その手はわやわやといやらしく動いている。彼の大人びて落ち着いた態度が、ここに来て変貌していた。

今までであった思慮深さは息を潜め、小さい頃のやんちゃさが戻ってきたかのようだ。それはとても懐かしくて嬉しくもあつたが、今この場でそれを出されても困ってしまう。

「大丈夫だからあ……………ッ……………そ……………なふうに触らな……………ふ……………っあ」

男らしい大きな手の平が白くて丸い乳房を包み込み、優しく揉まれるたびにむずむずするような感覚が生まれる。涼音は胸の下でお湯の出たシャワーヘッドを握り締め、その未知の感覚に耐えようとしたり。

「これがおっぱいか……。白くて綺麗で、それにふにゆふにゆしてすげー柔らかいのな」
いつの間にか肩口に陸の頭が乗っかり、こちらの肢体を見下ろしていた。

タオルは浴槽の縁に置いてしまったので、まごうかたなき全裸である。

シャワーからもうもうと湯気が立ち上っているものの、それで裸を隠せるわけもなく、小さくはないが自信があるともいえない胸の膨らみと平らなみぞおちの下にある一握りの黒い繁みをじっと見られ、恥ずかしさで目が回るようだ。

全身が燃えるように熱いのは肌を流れる温水だけのせいではないだろう。

「やっ、見ないでっば……!!」

「じゃあ触るのはいいの?」

「え……? んあ!」

ふたつの胸の先端を指でつままれ、涼音の背がビクッと反り返った。

ピンクブラウンの突起をくりくり振じられると、それまでただの粒だったのがしこっていき、硬く尖ってしまう。

「ちよ……やあ、あああ……!! んっ、んん」

刺激が加えられるたび、ピリピリした疼きが胸から全身へさざ波のように走っていく。「女の子は乳首いじられるほうが感じるって聞いてたけど、本当なんだな。ほら、もうこんなになってる」

そう言うとき陸は乳房を下から掬い上げて涼音に乳首が立っているのを見せつけた。

男の指が食い込んでいやらしく変形した自分の胸と、その中心でツンと立ち上がったピンクブラウンの乳首をしっかりと目にしてみたい、恥ずかしさで泣きたくなる。

「や、そんな……見せな……ん、やああ、あつああつ」

指がふたたび両方の乳首に触れたかと思うと、そのまま乳輪にぎゅっと押し込んで大きく円を描きだす。その卑猥な光景と、振じられていたときは違うもどかしいような刺激に少女はたまらず腰をもじもじと動かした。

「ほら見て。涼音のおっぱい俺にこんなにされて……すげーエロい動きしてるよ」

「っ、いや、いやあ……ッ。言わないでえ……」

彼の恥ずかしい言葉に、しかし胸の奥が甘く竦む。すり合わせた股がじつとりと湿ってくる感触を認めたくなくて、いやいやをするように頭を左右に振った。

「りくう……んっ、あ、あつ！ いやああ、また先っぽお……！」

陸はふたたび指で陥没した乳首をつまむと、その切っ先を爪でカリカリと細かく掻きだす。途端、敏感になった先端からピリッと痺れるような快感が走り、涼音はほっそりした



顎を仰け反らせて身悶えした。

「んっ……！ はあっ、はうう……っ！ あ、だめ、だめえ！ 先っぽ……ひっ、ああん！ あ……カリカリしちややだあ……も、離し……ふあああッ!?」

指が執拗に乳首を搔き、かと思えばキュッキュツと強く振じられてしまう。それに合わせて身体がビクビクと引き攣るように震えた。

「っ、じゃあ……身体、洗ってやるから……」

涼音の首筋に顔を密着させたまま、陸は膨らんだ乳房から手を離して彼女の手からシャワーヘッドを取り上げた。

ようやく胸から青年の手が離れて、涼音は安堵のあまり後ろにある陸の胸へもたれかかった。しかし乱れた呼吸を落ち着ける間もなく、彼の左手はふたたび胸へ、右手はあろうことかへその下——一番恥ずかしいところへと伸ばされる。

「やっ……だめ！ そこはだ……ひやううっ！」

陸の右手を両手で押さえ込むが、その隙に左手が乳房をくにゅくにゅ揉みしだいてくる。手の平にボディソープが垂らされていたのか、乳房はみるみるうちに泡にまみれていた。陸も興奮しているのか荒い息が耳裏にかかって、それがまたこそばゆい。

色味が濃くなった胸の突起を指先でぬるぬる転がされ、爪でカリカリと搔かれるたびに甘い電流が足の指先まで痺れさせていく。

「んやあああッ！ それ……っん、あ！ 変に、なっちやうのお……っ」

手からわずかに力が抜け、その隙を突いて彼の右手が黒い繁みをざらりと撫で下りた。

「あ、やめ……ひああ！」

涼音が制止する間も与えず、繁みの奥にある深い裂け目に指がするつと入る。慌てて手を押さえようとしますが、柔らかな肉唇に挟まれた指の動きを止めることはできない。

「大事などころなんだから……いっばい洗って、綺麗にしような」

熱に浮かされたような幼馴染の声に、少女はぎくりと動きを止めた。

先ほどからの愛撫で、大事などころはすっかり濡れている。それに気づかれるのも触られるのも顔から火が出そうなほど恥ずかしいし、この流れで考えればその洗い方はまともでないと思ってしまう。

「ま、待って、自分で洗……んっ！ あああああッ!!」

指がズツ……と秘裂の間を滑りだす。陰唇の谷底に指を密着させたまま大きく前後に動かされると、腰が浮き上がりそうなほどの甘い疼きが生まれた。

どうやら右手にもボディソープがまんべんなくまぶされていたようで、愛液だけでないぬるつきが指の動きを一層スムーズにしていた。

しかしそれをわかつているはずの陸が忍び笑いを漏らす。

「うわ、ぬるぬるじゃん。もうこんな濡れてんだ……やらしーなあ」

「ちが……ッ、それ、ボディソープだもん……っ」

からかう口調に思わず反論すると、彼はにやりと笑った。

「へー、濡れるって言葉知ってるんだ？」

「っ……」

まんまと誘導に引つかかかってカッと顔が熱くなる。

「バカッ、なに言ってる……んっ！ あっ、あっあっ……」

ふたたび指が動きだし、涼音は顎をそらせて断続的な喘ぎを漏らす。

左の乳房をつかまれていなければ、すでに腰砕けになってへたり込んでいただろう。陰唇に連なる包皮から蜜を滲ませる蕾までをぬるぬると指の腹で撫でられると、えも言えぬ愉悦が身体をジンと痺れさせ淫猥な粘液がとろとろ溢れてくる。

涼音の股間から、にちゅっにぢゃっぐじゅ、じゅぷつと淫らな水音が絶え間なく流れ、湯気のこもった空間に反響していた。

「音、いやあ……あ、あひっ……んんっ」

手淫に意識を朦朧とさせながらも彼の手から逃れようと腰を引くが、そうするほどに相手の股間へお尻をこすりつける形になってしまう。お尻の肉が硬くそそり立った陰茎の形を写し取り、それがまた羞恥心に拍車をかけた。

「なに、その腰の動き。誘ってる？」

情欲に染まった男のかすれ声が耳に入り、必死に首を振る。

しかし陸はそれを無視した。

「ね……ここはなんて言うか知ってる？」

ぬちゅぬちゅと秘所の裂け目を蹂躪していた指が、陰唇のつけ根付近にある肉莖に触れた。そのまま包皮をめくってしまふ。

快感ですっかり充血した秘玉に指が触れた瞬間、視界が白く染まった。

「ひぐっ！ ひぁ、あああッ！」

全身を痙攣させる涼音を無視して陸は淫核を指でころころ転がす。

「この小さな粒、クリトリスって言うんだよ。お豆って言う则可愛いよな」

「あっ、ん、ああっ、りくっ……ひ、ん……っ！」

耳元でささやかかれても頭にまったく入ってこない。淫らな蜜を肉芽に塗りたくるように指でくるくる撫でられるほど金切り声にも似た喘ぎ声のとめどなく出て、腰がビクビク跳ね上がる。

「いや……ッ、も、やめ……んひい！ ひッ、ひああ……！ あ……あっあっ！ あっあっあっ！」

凶悪なほどの快電流が子宮を焼け焦がし、膣口がヒクヒク収縮しては大量に溢れた蜜が内腿を濡らしていく。

「ここ、そんな気持ちいい？　ねえ、教えてよ」

彼の笑いを含んだ声にすら下腹部がキュンと疼き、子宮の奥から切ない欲望がせり上がる。羞恥心は本能に制圧され、涼音はもはやなにも考えることもできず、素直に首を縦に振っていた。

（おく……奥がむずむずする……）

膣奥のさらに奥——そこがむず痒くてたまらない。身体を中心をなにかで貫き、掻き乱してほしくてたまらなかった。

その切なる願いが伝わったのか、指が淫核から離れる。

「次は、中を洗ってやるからな……」

中指が蜜で濡れた蕾に当てられ——そのままぷつぷつと押し込まれた。

「……………！　ゆび……………ッ……………挿入……………ん、ふっ、んああっ」

未開拓の肉洞を男らしいふしくれだった指が焦らすように分け入ってくる。挿入された指一本だけでも感じてしまい腰がくねって動いてしまう。蜜壺に異物が押し入ったことで、その分だけ恥ずかしい粘液が糸を引いて浴槽へ垂れていった。

自慰などしたことがない涼音にとって、それは初めての異物挿入だった。

しかし執拗なまでの愛撫によって中はどろどろに蕩け、違和感はあるものの苦しみや痛みは感じずに済んでいる。

「うわ、キツ……それにすげー熱い。てか涼音の中、すっげーぬるぬるじゃん。いやらしいの」

陸が興奮したように息を荒らげながら指をゆつくりと抜き始める。

「ふ、っ……んん……や、やらしくっ……ないもん……ああ、っん」

指が抜けそうなところぎりぎりまで、ふたたびぬちゅつと啜え込まれる。指が膣壁をこすりあげると腰が勝手に揺らめき、ぞくぞくつと背筋に震えが走る。

「どうしてぬるぬるするのか教えてやろうか？ 太くて硬い男のチンポを早く啜えたいって、下の口が涎垂らしてるんだよ」

陸の指がぐぷつちゅぷつちゅくつと音を立ててトロトロに濡れた黒髪美少女の肉壺を掻き回す。

(太くて、硬い……)

それを思い浮かべた途端、下腹部がきゅつと引き攣れた。子宮もそれが欲しいと言わんばかりに、どつと愛液を吹き出してしまふ。

「うわっ、またぬるぬるが出てきた……。そんなに欲しいならもつと挿れてやるよ」

「え……？ つ、んん……!!」

蜜口に人差し指がぐつと押し込まれ、膣内に二本目の指が侵入してくる。そして。

「三本目……つと」

「く、つ、あ……ああ……」

ぬぶぶぶ、と卑猥な潤滑油に助けられて三本目の指までが膣内に収まってしまふ。

さすがに指が三本も入ると圧迫感が増えて呼吸すらままならない。目を見開く涼音は足を突つ張らせたまま白い喉をさらして、わななくように息を吸った。

「うあ……あ、っん……くる、し……」

膣口は男の三本指を咥え込まされたことで歪に変形し、ギチギチに締めつけていた。口を大きく開け浅く呼吸していると、陸が肩口から少し心配そうに顔を覗き込んでくる。

「大丈夫か、涼音？」

「ふっ、うう……。ら、らいひよ……ふ……」

圧迫感と強い異物感に口がまともに回らなくなっているが、何度も小さくうなずくと彼は少し安堵したようだ。

「じゃあ、動かすよ」

「んんっ、んあっ、はああ……」

ずず……と指の束が引きずり出され、指先が抜けようかというところでふたたびぬぢゅつと音を立てて膣に埋め込まれる。

引き抜かれるたびにぞつとするほどの喪失感が、挿入されるたびに息苦しいほどの圧迫感が生まれ、意識が朦朧としていく。しかしそれも幾度か繰り返されると、固い処女肉が

ほぐれ始め——新たな快感が生まれ始めていた。

(な、に？ や……気持ちいい……)

固かった膣内部がようやく熱く熟れ、抽送される指の感触を味わい始める。

「あ……あつ、ああ……ん、つぶ……ううん、あ、あんつ、あ、ああ、ああ……
……ッ」

指の束が肉壁をズリズリこすりあげると、えも言われぬ甘い痺れが膣奥を直撃し、全身を熱く燃え上がらせる。いやらしい蜜がとめどなく溢れて、それがまた陸の指に絡みついて、じゅぷつじゅくつちゅぐつと粘ついた音を奏でながら敏感になつた肉筒を刺激する。

(もつと……もつと奥、欲しい……もつと、激しく……)

いつの間にか涼音は指のゆつたりしたりリズムが、単調な抽送が物足りなくなっていた。じりじりと身を焦がすようなじれつたさが芽生え、恥じらいも捨てて指の動きに合わせ——もつと指を奥深くに咥えようと自ら腰を動かしてしまう。

おねだりの気持ちを含めて上目遣いで後ろを見やると、陸がほの暗い喜びの笑みを浮かべた。

「自分から腰振つて……もつと動いてほしいの？」

「んっ、動いてえ……、はあ、んあああつ……！ あ、あん！ もつとおくう……も、もつと、もつとお！ 激ひくう……！」

「いやらしい奴……だつたらその処女マ○コ、指で搔きむしつてやるよ」

青年の嗜虐的な言葉に胸が甘く竦みあがる。そこへ――。

「あ……？　　ッ！　　んあああああッ!?」

ぐぢゅっ！　とひととき大きな音を立て、ぎりぎりまで引き抜かれた三本指が蜜口に容赦なく叩き込まれた。指は立て続けに膣を突き上げる。

「あひいッ！　　あっ、あっあっあっあっ……！　　ひぎっ、ひぐううううう！」

涼音の肉洞に擬似男根と化した指の束がじゅぶじゅぶと激しい水音を立てながら勢いよく抽送される。敏感になつていた粘膜が激しくこすりあげられ、目も眩むような強い愉悅が涼音を悶絶させた。

「激ひい……！　　激ひいのおっ！　　あっ！　　あんっ、すごいっ、すごい……ッ！」

涼音は唾液まみれの口を大きく開けてひっきりなしに嬌声をあげる。

背中が軋むほど弓なりになり、目じりから快感の涙がこぼれていく。肉体が女の悦楽に震え、悦よがり狂つていく。

「気持ちいいか？　　ほら、ちゃんとイイって、言えって！」

指の動きがさらに激しさを増し、あまりに強い快楽で意識が飛びそうになる。

「い……イイッ！　　イイのお……っ、激しいの、すごいイイ！　　あ、あ……？　　や、なにか来る、なにか来ちゃうううう！」

ふいに涼音は強烈ななにかがすぐそこまで迫っているのを感じた。

大波のようなそれに吞まれれば自分が自分でなくなってしまうような気がして、お腹の底が恐怖で縮こまる。

「大丈夫、イっていいよ。怖くないから」

気持ちを見透かしたように背後からなだめるような優しい声が聞こえるが、指はぐちゅぐちゅと容赦なく動き続ける。

勢いづいた指先が粘ついた愛液を利用して下りてきた子宮口を掠めた瞬間。

「あああああああああああああああ！」

奇妙な浮遊感とともに目の前が真っ白に染まる。

背を弓なりに反らし、つま先をピンと突っ張らせ、涼音は全身を激しく痙攣させた。それに合わせて陸が指を引き抜くと、膣口から透明な飛沫がピュッと吹き出す。

「はっ、はあっ、はあっ、ふ……ふう……」

生まれて初めての絶頂が静まってくると、止まっていた呼吸を大きく繰り返し、ぐったりと後ろにもたれた。指が秘所からぬちゅつと音を立てて引き抜かれ、すっかり脱力した肢体が抱きしめられる。

「そろそろ出よう……俺も限界。最後はちゃんと向き合っていたいから」

「陸……」

その様子に陸も思わずあくびが出る。涼音が来るまで少し体力を回復させないと——そう思いながら軽く目を閉じた。

遠くでなにか音がする。

「ん……」

意識が浮上すると耳に届いていた音も、より大きく鮮明になっていった。それは玄関のドアが叩かれる音だ。ついさつき目を閉じたはずなのに、すっかり眠っていたらしい。

千代もまだこちらの腕枕で気持ちよさそうに眠っている。

「つと、ごめんよ」

「……んうー……？」

彼女の頭を手でわずかに持ち上げ腕を引き抜くと、陸はとりあえずトランクスを穿いて玄関へ向かう。

鍵を開けて出ると、幼馴染の少女が顔を伏せて立っていた。

再会してから初めて見る彼女の私服は裾のふんわり広がった白いシャツにネイビーのロングカーディガン、そしてデニムのショートパンツという快活そうなスタイルだった。アクセントに真鍮のメダルがついた革紐のロングネックレスを身につけている。髪型もポニーテールにしている。元気な印象を受けるのだが——当の本人は妙に大人しい。

やはり千代とエッチしたことを怒っているのだろうか？

「よ、よく来たな」

声をかけると、涼音はゆっくり顔をあげた。そこに浮かぶ表情に息を呑む。

潤んで濡れ光る黒い瞳に赤く上気した頬。かすかに開いた口からは熱っぽい吐息が漏れ、時折舌がちろりとこのぞいては唇を湿らせている。

明らかに欲情した黒髪美少女が青年の前に立っていた。

「陸……ああ、やつと会えた……」

涼音はふらりとした足取りで陸に近づくとその胸に飛び込んだ。

「す、涼音？」

最初からツンツンしていない様子に、そして発情の匂いを漂わせる彼女に陸は目を白黒させる。

「どうした？　なんか様子おかしいけど……」

「おお、いい具合に淫欲に染まっておるな」

いつの間に近づいてきたのか、裸の千代が後ろからひよこつと顔を出す。

胸にしがみついていた涼音は、顔を覗き込む犬耳娘に恨めしそうな視線をくれた。

「っ、千代お……あんたって奴は……っ」

「陸の愛撫はどうであった？　堪能したか？」

「は？ え？」

二人の心のなかでの会話を聞いていない陸は千代が涼音にかけた言葉の意味をわからずなく、ただ困惑する。とりあえずふらふらしている彼女の身体を支えて部屋に入るのを手伝うと、その間に千代は種明かししてくれた。

「先ほどわしと涼音の耳を繋いでいたと話しただろう？ そのとき耳の繋がりは切ったが、代わりに触觉を繋いだのよ。つまりは先ほど陸がわしにしたことは同時に涼音にもしたことに成り——だから奴はこんなにも淫欲に支配されておるのだ。途中で繋がりは切られしたが……見よ、この蕩げきつた顔を。アソコも濡れに濡れておるぞ」

布団の上にてたりと座った涼音は、向かいに腰を下ろして嗤う千代をキッと睨みつける。「悪趣味だわ！ 悪ふざけにも程がある……ッ。変な目で見られないようにするの、大変だったんだからね。なんだつてこんなことするのよ」

「なあに、ちよつとしたテストよ。わしの侵蝕を断ち切れるかどうか知りたくてな。正直期待はしておらんかったが、ちゃんと成し遂げたではないか。やあ、見直したぞ」

「ふん、そんなこと言ったつて許してあげないから。それより千代はもう精子もらったんでしょ？ 今度はわたしの番なんだから、あんたは早く帰りなさい。ね、陸？」

「お、おうっ」

突然話を振られ、慌ててうなづく。その返事が気に入らなかったのか、千代は隣に座つ

た陸のわき腹に抱きついた。

「あ、こちら！」

「陸う、あんなガキよりわしの身体のほうが気持ちよかる？ ろくにおぬしを悦ばせられない涼音より、たっぷり口でもご奉仕してやれるわしのほうが魅力的である？」

そう言うど股間に頭をうずめ、たちまちトランクスの前を押し下げてしまふ。でろりと転がり出たお疲れペニスに頬を寄せると、少女は犬のように小鼻をひくつかせた。

「んー、陸とわしの愛液が混じつたいやらしい匂いがするのう。官能を誘う香りだ……んれろお」

「あ、ああ！」

突然千代に男根を舐められて陸はビクツと腰を揺らす。若い雄はその一舐めでたちまち元氣を取り戻した。

「ほれ、陸のココはわしの虜だぞ。あんなに萎れていたのにもうこんなになつて……涼音ではこうはいくまい？ ちゅぶ、ぢゅつちゅうう……れろおっ」

舌を大きく伸ばして涼音に見せつけるように千代がいやらしくペニスを舐めあげる。

「あう、千代……千代お……っ」

陸は思わず千代の白い髪をかき混ぜて甘い声を漏らした。彼女の目の前で他の女の子にイチモツを舐められる後ろめたさが余計に興奮を煽ってしまう。

暗褐色のマシユマロのようだったムスコは天井目指して太く長く育ち、凶悪な肉塊へと変貌した。

目の前で突然始まったフェラチオに幼馴染の少女は顔を赤くしながらも魅せられたように釘づけになっていたが、陸の切ないうめき声に我に返ると、羞恥心もどこへやらせつかくのおしゃれな服を脱ぎ捨て生まれたままの姿になった。

「わ……わたしだってそれくらいできるんだから！ バカにしないでよね！」
変な対抗心に火がついたのか、千代の隣で同じようにうづくまると目をぎゅつとつぶつて恥ずかしそうに舌を伸ばしてくる。

亀頭のエラに触れる、ふたつの温かい生肉の感触。しかし涼音は舌が陰茎に触れた途端、ビクッと顔を引いてしまった。

「涼音……そんな無理しなくていいから」

「む、無理なんてしてない！ 陸までわたしをバカにするの？ わたしだって好きな人のお、おちんちん、舐めてあげたいのっ。わたしだって陸のこと、うんと気持ちよくしてあげるんだから」

そう言うとしつかり目を開いて狙いを定め、舌先をエラの出っ張りに引っかけては何度も弾いてみせる。

「あつ、そ、それ気持ちいい……ああ！」



敏感な部分を刺激されてたまらず熱い息を吐く。感じ入った反応に自信がついたのか、涼音はエラから離れた舌を繁みの中に差し込み、竿の根元から上へねつとりと舐めあげた。時折唾液を絡ませた舌で幹をゆるゆると扱き、裏筋の歪な縫い目をチロチロと舌尖で辿っていく。

「す、涼音……」

彼女の献身的な姿に陸は思わず胸が熱くなった。

「ふふん、まあまあだな。どれ、わしも手伝ってやろう」

涼音の口淫を見守っていた犬耳娘も反対側から顔を近づけて竿に舌を巻きつける。

二人の舌が競い合うようにペニスを這いずり回り、さざ波のような愉悅を陸にもたらし、対照的な美少女たちの顔が淫欲でとろりと蕩け、その狭間で今までにないほどペニスが赤黒く膨張し、太い血管がビキビキと浮かび上がる。

「あ……ふ、二人とも、そろそろ……その」

気持ちがいいものの、口腔内や手で扱かれているわけではないのでこれだけではイけそうになかった。真綿で首を絞められるようなじれったさに最後の仕上げをしてほしいと言外に頼むと、二人の間で目に見えない火花が散る。

「わ、わたしの番よ！ 千代はもうだめなの！」

そう言うのと黒髪の美少女は白髪の美少女を強引に押しつけて青年の膝に乗り、自らの秘

所を一気に貫いた。

「うっぐ……！」

「——！」

涼音が声にならない悲鳴をあげる。濡れそぼったでこぼこの肉壁を男根がずりりりとこすりあげ、蜜壺の最奥を小突きあげた。

「涼音……、中もうぐちよぐちよつ。それにキツ……！」

千代の中とはまた違つて彼女の中はさらに締めつけが強い。わずかに腰を引いただけでもぬるぬるの淫肉がしがみついてしつかりと扱いてくれる。

目から火花が出るような強烈な愉悅が陰囊を竦ませ、先ほど千代にたっぷり出したというのに若い雄根はここにも種つけすると勇猛に主張しだす。

「う、動くぞ！ 動くぞおおお！」

陸は涼音の尻をがっちりつかみ、関の声をあげた。最初から手加減なしのピストンで彼女の子宮口を突き破らんばかりに突き上げる。

「んきやあ！ やっ、あん！ 深いっ、ああつ、子宮に入っちゃう！ あつんつああつ、い……いいっ、もつと、もつと深く！ 激しくしてえええ！」

高く結い上げた涼音の黒髪が大きく跳ね、じゅぶじゅぶぶつ！ と激しい水音が部屋に響き渡る。騎乗位であるせいか、自重によつてさらに膣奥の奥まで——子宮口まで亀

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ラブコメディ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルはわからない
ドキドキラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



女刑事美優

美優は自らの身体から

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!
アクターズノベルズ



異世界で
手に入る
宝珠

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫